

## 刊行に際して

石田頼房先生は、東京都立大学で35年間、工学院大学で4年間、39年間を大学教員として多くの「ひとづくり」に携われ、「まちづくり、むらづくり」の研究と実践に取り組み、2015年11月、83歳の生涯を全うされました。

この『石田頼房先生 追悼集』は、東京都立大学で学んだ者を中心とする有志が集まって、石田先生を追悼するために、「石田先生の業績」を振り返り、「石田頼房先生から我々は何を手渡されたのか」、そして「次世代へ何を手渡すべきなのか」を、学恩を受けたものが、それぞれの位置、立場で改めて考え、整理し、確認し、そして次代に残していこうと、取り組むことにしたものです。

私が初めて石田先生にお会いした時の先生の印象は、先生の手書きの字体のように四角く、真っすぐで、冗談など通じることはない先生とっていました。石田先生が声をあげて笑われたということも記憶はないのですが、その顔からは、笑っている、喜んでいる、悲しんでいる、心配している、怒っている、励ましている、じつはとても表情も、感情も豊かな先生でした。1987年に『日本近代都市計画の百年』を上梓されたころから、先生は白髭の石田先生になられ、かえって表情が豊かになられたように感じ、なんでも遠慮なく話をさせていただけようになったと思います。

私は二度、先生と海外にご一緒させていただいたことがあります。2000年の夏、フィンランドで開催されたヨーロッパ日本研究協会 (EAJIS) の第九回大会では、石田先生は奥様とともに参加されました。研究会の間は奥様おひとりでお出かけになり、夕食時に、「どこそこはどうだった、なにがあった、こんなことがあったのよ」といった奥様からのご報告に、先生は笑みを浮かべながら、そこをご一緒に歩いていてその楽しかったことを思いめぐらしておられるかのように、耳を傾けておられた様子が思い浮かびます。

そのような誰にも敬愛された石田先生を追悼し、みんなで刊行させていただいたこの追悼集を、石田頼房先生と奥様の裕子さまに捧げます。

編集委員を代表して 中林 一樹